

人類がいまだかつて経験したことが無い高齢化が進む我が国。その2030年の姿をイメージし、今から地域で何をしなければならないかを参加者と一緒に考える「高齢社会2030を考える会」(第1回)を2月1日 梅田グランフロント都市魅力研究室セミナールームにて開催しました。

自治体、大学・研究機関、社会福祉法人、NPO、企業・一般市民の約50名の参加がありました。



第1回
人とまちのウェルビーイング
地域の再起動に向けて
高齢社会
2030を考える会

参加費 無料 事前登録 必要

日時
2019年2月1日(金)
17:30-19:30

定員 先着50名様

会場
梅田グランフロントC棟713
大阪ガス㈱エネルギー・文化研究所
都市魅力研究室

第1部 17:30-18:20
『世代間交流の意義～地域課題解決に向けて』
講師：内田勇人 先生
(大阪ガス㈱エネルギー・文化研究所 都市魅力研究室)

第2部 18:20-19:30
対談～会場とのディスカッション
対談者：内田勇人 先生、エネルギー・文化研究所 都市魅力研究室

お申し込み・問い合わせは
大阪ガス㈱エネルギー・文化研究所
担当：遠座(おんざ)

参加お申し込みの際は、以下のメールアドレスに
お名前とご所属、参加人数をご記載ください。
MAIL: onza@osakagas.co.jp
URL: <http://www.os-gas.jp/>
TEL: 06-6200-2728

まず、遠座研究員が、2030年の予測データ…少子化により高齢化率が上昇し、3人に1人が高齢者になる中、単身世帯割合が全世帯の38%近くにまで増加し経済格差も広がる。既に国の政策経費の50%超が社会保障関連で占められるに至っており財政的に公助・共助(年金・医療・介護の公的保険制度)の将来は非常に厳しい…を示し、地域における互助のしくみを再構築していく必要があり、これからの社会は、幸福感も含め人と人との“関係性”に着目し、生きる力・活かす力(エネルギー)とそれを引き出す知恵(文化)について考えていくことが重要ではないか と会の趣旨説明を行いました。

続いて、日本世代間交流学会理事で兵庫県立大学内田勇人教授による「人とまちのウェルビーイング 地域の再起動に向けて」と題した講演があり、

- ・世代間交流は、既に仕掛けないと自然には生じない時代になっている。
- ・アメリカの交流施策は『Use it, or lose it = 「頭、体、心」を使うのか、それとも錆びつかせてしまうのか』の考え方を元に学び・役割・仲間づくりを行っている。



「生きがい」と「幸福感」は密接に関係していて、その背景として“社会参加”や人々の“関係性”がある。

- ・高齢者が行う小学校での教育支援や児童養護施設での自然体験支援活動に関する研究から、これら交流活動が“高齢者の心身の健康に良い影響”を与えており、子どもたち的高齢者に対するイメージも「話しやすい」「強い」「やさしい」「頼りがいがある」など向上して“子どもの他者との関係力の発達”に寄与していることが判った。
- と 世代間交流プログラムを開発していくことの重要性が示されました。

その後、エネルギー・文化研究所の池永所長から、人々の“地域に住む”という感覚が希薄になっていることや、“競争や進化を希求する文化をもつ40歳代以上”と“分かち合いや繋がりを重視する文化の30歳前半以下”の世代間の断層と葛藤、急激な技術の発展に対し社会(会社・家族・地域)が“適合不全”を起こしてバラバラになっていて、今こそ文化(Culture=耕す)＝「耕し、種を蒔き、水や養分を与え、収穫し、種をとり、を繰り返しながらも5%ほど新たなものを加えていく」継続的な発展の営みを意識し、もう一度各人に与えられた役割などを表す「分(自分、分別、本分…)」をキーワードに 個人と社会の関係を作りなおす必要がある との提言がなされました。



対談では、“自分で選択できること”が人々の幸福感に大きく影響するため、多様な選択肢が必要なことや「食」が文化の伝承や人の交流に大きな役割を担うことなどが取り上げられました。

会場から、高齢者の社会参加の効果を更に明らかにするためのアプローチや効果の測り方についてなど 質問が出て、あっという間の2時間でした。

この会は今後、4半期ごとに開催する予定です。